

12月に向けて

代表取締役 三田雅憲

2021年も残り1ヶ月となりました。

今年も新型コロナに日本国民、いや全世界の人々が翻弄され、業界によっては大きな打撃を受けて大変な思いをされている人々もたくさんおられます。働き方も「リモートワーク」などという働き方が出てきて、戸惑っている人々も多いと聞きます。

そんな中において、私ども光栄プロテックではコロナ感染者を出さず、無事に営業し続けたことを本当に感謝しております。社員諸君にもいろいろな協力を頂いたと思います。しかし、世界はまだまだコロナ禍が続いております。気を抜かずに来年に向けて頑張っていきましょう。

今月は、プレジデントオンラインで反響の大きかったキャリア部門の記事を紹介いたします。早期退職経験者で、現在は行政書士として中高年の相談を多く受けている寺田淳氏は「早期退職で失敗する人には共通点がある」と話しておられます。

ほぼ一昔前の2008年秋から始まったリーマンショックの時に、生き残り策の一環としてのリストラや割り増し退職金による早期退職勧奨が多くの企業で実施されました。そして今、先の見えてこないコロナ禍によってあの事態が再来する可能性が濃厚になっています。ここでは、事例に基づく早期退職後の失敗例の中から、特に管理職世代を中心に紹介したいと思います。なお、年齢と役職は退職時のものです。

（事例）自負心の取り違い 47歳 企画課長

この企画課長は、営業職から企画職に異動し課長職も5年が経つ頃、次第に不満を募らせていったのです。その会社では50歳で課長職というのが平均で、遅れているどころか人並み以上の肩書だったのですが、本人はこう話していました。「実際は私一人の企画で、部下はただ私の指示通りに動けば良かったのです。企画力も若手以上に今にマッチしたものを生み出しているのです。これだけ会社に貢献したんですよ。自負の一つもあって当然でしょう?!」ところが会社からの評価は正反対でした。「いくら言っても自分一人で全てをやったような錯覚に気付かない。」「部下に対しての感謝がない。」「また「謙遜が無い。空気が読めない。」という思いもよらない辛口評価をされていました。結局、彼は早期退職をほのめかせば慰留されると思ったものの、全く顧みられることが無かったことに腹を立てて、あてもないのに感情的に早期退職に応じたのです。「自分ならどこにでも居場所がある!」というのが退職時の挨拶だったそうです。

この方とは、残念ながら1年後から音信不通となりました。傍目八目とは、言い得て妙でして第三者の視点で見れば何を彼が間違えたかは明白です。この事例に共通する点のひとつは、客観的視点に欠けている点です。自信や自負は大切ですが、もっと大切なことは自分は他人からどのように見られているかという自分を客観的に見る目が欠けていました。今回のコロナ禍では、早期退職勧奨どころか会社の存続自体が危ぶまれる状況も視野に入れることが大切です。

とあります。又これを書いている時期にも「フジテレビが50代以上の早期退職者を指示」の記事が発表されました。若い頃はまだしも、40代~50代を向かえても他者に対する感謝の気持ちや、過度なおごりは本当にいらぬものです。何事に関してもおごらず、謙虚に感謝の気持ちで物事にあたれば、そんなに大きく人生がそれることはないと思います。

正月まで残すところも1ヶ月となりました。お互いにそういった気持ちと情熱をもって仕事に立ち向かう精神力で2021年を乗り切っていきましょう。